

# カリギュラ, コタール, 背教者, クラマンズ ——アルベール・カミュの描く悪魔的人物<sup>(1)</sup>

とう うら  
東 浦 弘 樹

## は じ め に

カミュは、悪に陥った人間を描くのがうまい。『ペスト』のリウーやタルー、『戒厳令』のディエゴとヴィクトリア、『正義の人々』のカリヤーエフとドーラ、「生まれ出る石」のダラストなど、カミュの思想や理想を体現していると思われる人物たちに魅力がないとは言わない。しかし、彼らはどちらかといえば模範的な人物であり、血肉をもった人間としての存在感が薄いように感じられる<sup>(2)</sup>。それに比べ、『カリギュラ』の主人公であるローマ皇帝カリギュラ、『誤解』のマルタ、『ペスト』のコタール、「背教者」の元宣教師、『転落』のクラマンズたちは、悪人であるにもかかわらず、いや、むしろ悪人であるからこそ、人間臭い魅力に満ちている。『戒厳令』のペストとナダは、ナチや対独協力者をあらわす人物であり、その明白すぎる象徴性ゆえに、あまり評判が良くないが、どこか蝶番のはずれた彼らのユーモアは、その残虐性とも相まって、

- (1) 使用エディションと略号：

*I. . . Albert Camus, Théâtre, Récits, Nouvelles*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1962 ; édition utilisée : 1974.

*II. . . Albert Camus, Essais*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1965 ; édition utilisée : 1977.

- (2) ただひとりの例外は『ペスト』の下級官吏ジョゼフ・グランであろう。グランは妻に捨てられ、決して完成することのない小説の書き出しを、書いては消し、消しては書きしている哀れな、そして滑稽な人物であるが、同時に、物語に登場する唯一の英雄として描かれている。「もしどうしてもこの物語に英雄が必要なのだとすれば、筆者は、わずかな善意と一見して滑稽な理想だけをもった、この取るに足りない控えめな英雄（＝グラン）を提供する」（*La Peste*, I, p. 1331）。

ベケットやイヨネスコの所謂不条理演劇に登場する人物を思わせる。彼らに比べれば小粒な傍役ではあるが<sup>(3)</sup>、『正義の人々』で、獄中のカリヤーエフを、猫がネズミを弄ぶようにいたぶり、追い詰めていく警察長官スクラートフも、忘れがたい人物である。

『裏と表』の再版のための序文」の中で、カミュは自らを「厳しい芸術的伝統を賛美する奴隷」と規定し、作品を書く上で、自らの中にある「奥深い無秩序」「混乱や、ある種の本能の激しさや、気品のない放縦」を「運河で導き、防波堤を築く」ことをころがけてきたが、「ときには、そこから堅苦しさが生じているかもしれない」と述べている<sup>(4)</sup>。だが、悪魔的人物を描く際には、そうした芸術的禁欲主義から、一瞬、解放され、嬉々として筆を走らせているようにも思える。

本稿では、カミュが描いた悪魔的人物のうち、カリギュラ, コタール, 背教者, クラマンズの4人を取りあげたい。「人間は死ぬ。だから幸福ではない」という「真実」——「実に単純で明快で、いささか馬鹿げてもおり、しかし見つけるのは難しく、担うには重い真実」<sup>(5)</sup>——に目覚め、皇帝の権力を利用して、暴虐の限りを尽くすカリギュラ, ペストの中にあつて「子供たちや人々を死なせるものを心の中で是認した」<sup>(6)</sup>コタール、「ただ言葉だけで、邪悪な人間の一群の上に君臨する」<sup>(7)</sup>ことを夢みてアフリカの砂漠に旅立ち、囚われの身となり、物神崇拜に改宗し、新たに送られてきた宣教師を射殺する背教者、「他人を裁く権利を手に入れるために」<sup>(8)</sup>告白をしてみせるクラマンズは、いずれも、人間＝他者を否定する悪魔的人物であり、孤独の中で生きている。しかし、同時に、彼らは他者を必要としている。どんなに人間を否定しようと、

(3) 『異邦人』のサラマノ老人、『ペスト』で、一日中、豆をひとつの鍋から別の鍋へと移し時間をつぶしている喘息もちの老人、バルコニーに出て、野良猫を呼び寄せ、唾を吐きかける老人など、傍役を描くのがうまいというのもカミュの特徴である。

(4) *Préface à la réédition de L'Envers et l'endroit, II, p. 12.*

(5) *Caligula, I, p. 16.*

(6) *La Peste, I, p. 1469.*

(7) « *Le Renégat* », *L'Exil et le royaume, I, p. 1582.*

(8) *La Chute, I, p. 1546.*

彼らは他者なしでは生きることができないのである。

「人間が逃げ込むのは人間たちの中である。最も孤独であること、最もアナキストであることを望む人間は、最も人の目に映りたいと願っている人間なのだ」<sup>(9)</sup>と、カミュは初期エッセイ集『貧民街の声』に書いている。カリギュラ、コタール、背教者、クラマンズの中には、他人に見られたい、認められたいという欲望、あるいは他人に理解されたいという欲望、他人と同じでありたいという欲望があるのではないか。彼らの悪魔的な行いは、ある意味では正当であり人間的でもあるそれらの欲望が非常に屈折した形であらわれたものにはかならないのではないか。

## カリギュラ

ローマ皇帝カリギュラは、妹であり愛人でもあったドリュジラの死を機に、「この世界はあるがままの姿では我慢のならぬものだ」(I, 15)と悟り、「不可能なもの」を求め、徹底した価値の転覆を図る。彼は貴族たちを恣意的に殺し、辱め、財産を奪い、国の食糧倉庫を閉鎖し、飢饉を宣言する。

「アメリカ版『戯曲集』への序文」の中でカミュは、カリギュラについて、「彼は友情も、愛も、たんなる人間の連帯も、善悪さえも拒否する」と述べ、「彼の真実が運命に反抗することだとすれば、彼の過ちは人間を否定することである」と書いている。カリギュラは、「論理に忠実」であろうとするあまり、「人間に対して不忠実」なのである<sup>(10)</sup>。

カリギュラは孤独を恐れない。「あなたの孤独はなんといまわしい孤独か」と叫ぶ詩人シピオンに、彼は「人間は、決してひとりになどなれないのだ」と答える。彼の孤独は、「(彼が)愛した人々、愛さなかった人々、(彼を)愛してくれた人々、後悔、欲望、苦さと甘さ、淫売たちと神々の郎党」の存在に「毒されている」。「一本の木の沈黙や震え」のような優しく穏やかな「真の孤

(9) *Les Voix du quartier pauvre*, in *Cahiers Albert Camus 2, Ecrits de jeunesse d'Albert Camus*, Gallimard, 1973, p. 287.

(10) *Préface à l'édition américaine du Théâtre*, I, pp. 1729–1730.

独」(I, 59-60)を夢みる彼は、「自らの望む永遠の孤独を完成する」ために、「人々の命を打ち砕く非情な論理」を実践する(I, 106)。カリギュラは、全ての人に背いて、孤独であること、臣民たちを犠牲にして、「帝国でただひとりの自由な人間」(I, 28)であることを願っているのである。

だが、カリギュラのことばを文字通りに受け取っていいものだろうか。彼の行動は全て、他者にみられることを前提としている。彼自身、認めているように、彼の暴虐は全ローマを舞台とする壮大なスケールの芝居であり、「このうえなく見事な見せ物」にほかならない。この血なまぐさい劇の作者であり、演出家であり、役者でもある彼には、観客が必要である。第1幕の終りに、彼は言う、「俺には、人間たちが、見物人が、犠牲者が、罪人が必要だ。(……)罪人を呼び入れよ。俺には、罪人が必要だ。やつらはみんな罪人なのだ。死刑囚を呼び入れよ。見物人だ、俺は見物人が欲しいのだ」(I, 28)。

演劇は、彼にとって、教育的価値をもっている。人間たちを「真実の中で生きさせる」(I, 16)ために、彼は「平等という賜物」(I, 27)を与え、全ての人を同じ不幸の中で生きさせようとする。彼は、貴族たちから息子を、父親を、妻を奪い、殺害する。だが、愛する者を失う悲しみは、カリギュラにとって未知のものだろうか。貴族たちが感じている苦しみを、彼はドリジュラが死んだときに感じ、いまなお感じつづけているのではないか。彼は自らが受けた苦悩を他人にも受けさせようとしているだけなのではないか。彼はドリジュラの名を口にせず、周りの者にもそれを強いる。しかし、結局のところ、彼は貴族たちの愛する者を殺すことによって、全ての人間を自分と同じ不幸の中に引きずり込もうとしているのではないか。

彼はドリジュラを失った悲しみが癒えることを望んではない。むしろ悲しみが永遠に続くことを望んでいる。彼は苦しむことを恐れない。彼が恐れるのは、ひとりで苦しまなければならないことである。ひとりで苦しむことを避けるために、万人を自分と同じ苦しみに引きずり込もうとすること——それは、きわめて子供っぽい反応だろうし、ある意味では、墮落したロマン主義ともいえるだろう。しかし、そこには、他人に理解されたいというきわめて人間的な

欲望をみることができる。

「理解」ということばは、おそらく『カリギュラ』を読み解くキーワードといえるだろう。カリギュラに父親を殺されたシピオンにセゾニアは言う——「まず、舌を引き抜かれたお父さんのひきつった顔を考えてごらん。(……)それからカリギュラのことを考えてごらん。(……)よく聞くのよ。彼を理解しようとしなさい」(I, 53-54)。シピオンはこの奇妙なことばに啞然とする。しかし、やがて彼はカリギュラを理解するにいたる。ローマを去るにあたってシピオンはカリギュラに言う——「お別れです。僕はあなたを理解できたように思うからです。あなたにとっても、あなたによく似た僕にとっても、もはや出口はありません。(……)全てが終わったとき、僕があなたを愛したことを忘れないでください」(I, 101)。

カリギュラ暗殺の首謀者ケレアもまた、カリギュラの苦悩と絶望を理解している。彼は何が皇帝を破壊へ駆り立てているかを知っており、それだけにいつそうカリギュラを危険だと思っている。「私にはあなたがあまりにもわかってしまうのです。ひとは心の中で隠そうとしている自分の顔を愛することはできないものです」と、彼は言う (I, 77)。

カリギュラの絶望を理解するのはシピオンとケレアだけではない。「俺を殺すのは、俺に息子や父親を殺されたやつらではない。やつらは理解した。やつらは俺とともにある」(I, 103) と、カリギュラは言う。彼らはカリギュラが口の中に感じている味——「血でもない、死でもない、熱でもない、それらが全部ひとつになった味」(I, 26)——と「同じ味を感じている」。彼らに殺されるのなら、カリギュラは本望だろう。だが、彼を殺すのは、自分の利益と安全しか考えない貴族たちである。暴君は倒され、全てはもとに戻る。だが、勝利者はどこにもいない。

「最も人間的であり最も悲劇的な錯誤の物語」<sup>(11)</sup>である『カリギュラ』は、主人公が他人に自分を理解させようと試み失敗する物語でもある。彼はローマ全土を舞台に、全ローマ市民を観客にみたと、壮大な劇を演ずるが、観客から

---

(11) *Ibid.*, p. 1730.

理解されぬまま、孤独の中で死んでいく。だが、彼の舞台の外には、現実の客席があり、そこには現実の観客がいる。カリギュラの物語をごく近くで最後までみたこの観客は、カリギュラの苦悩と絶望を理解しないだろうか。

「他のやつらは権力がないから作品を作る。俺は作品など必要としない。俺は生きるのだ」(I, 98)と、カリギュラは文学を否定する。そこに彼の過ちがあった。他人に理解してもらうために頼るべきは、権力ではなく、文学ではなかったか。カリギュラは、無論、カミュの分身ではない。しかし、彼の背後には、自分の苦悩を観客＝読者に理解させたいと願う作者がいる。行動者カリギュラが権力によって試み、失敗したことを、文学者カミュは作品によって達成しようとしているといえよう。

## コタール

ローマ皇帝の座にあるカリギュラとは違い、オランの一市民にすぎないコタールには、万人を自分と同じ苦悩の中に引きずりこむことはできない。彼はただ、ベストの到来を喜び、心の中でベストに同意するだけである。コタールは、ナチス占領下のフランスの対独協力者をあらわす人物とみなされることが多いし、それは必ずしも間違いではない。だが、彼はそのような単純な図式を超えた複雑な人物であり、タルーがそのノートに記しているように、「他の誰より理解しようとするに値する人物」(I, 1381)でもあると思われる。

コタールは、おそらく、『ベスト』の中で最も謎めいた人物であろう。彼は警察に逮捕されることを恐れている。しかし、彼がどのような犯罪をおかしたのかは、誰にもわからない。彼は孤独な人間であり、なんとかして自らの孤独をやわらげたいと願っている。自殺を試みる前に、彼は二度にわたってアパートの隣人であるグランに話しかけている。彼は階段で箱をひっくり返したグランがチョークを拾うのを手伝い、何に使うつもりかと尋ねる。しかし、チョークは、小説を書くという秘密の仕事と結びついているため、グランは軽々しく話すのを嫌い、ラテン語を勉強しなおすために使うと、ことば少なに答えるに

とどめ、コタールにチョークを一本与えるだけで部屋に入ってしまう。

数日後、コタールはマッチを借りるためにグランの部屋を訪れる。彼はマッチ箱を返しにくると言うが、小説の執筆中であったグランは、返す必要はないと言って、コタールを部屋から追い出してしまう。その翌日、コタールは、グランに貰ったチョークで「お入りください。私は首を吊っています」と書いた紙を扉に貼り、自殺を試みる。他者との接触に飢えたコタールは、それがえられないことに絶望し、自殺を試みるのではないか。グランの冷淡さは、それ自体はとるに足りないことだが、コタールに最後の一步を踏み出させる契機となったのではないか。自殺を告知する紙を貼りだしたのは、他者との接触を求めたコタールの最後の試みなのではないか。

貼り紙をみたグランはリウー医師を呼び、コタールはすんでのところを救われる。自殺に失敗したコタールは、急に人あたりがよくなる。彼は人間のぬくもりに目覚め、打ち明け話を聞いてくれる相手を捜しているのだろうか。「他人と離れずにいるただひとつの方法は、結局のところ、良心に恥じるところがないことだ」と、タルーはコタールに言う。しかし、コタールはそのような考えを受け入れようとはしない。「その点にかけちゃ、誰も他人といっしょにはいられませんよ」と、彼は答える (I, 1378)。

街が閉鎖され、ペストが勢いを増すにつれ、コタールは陽気になっていく。いままでのうのうと暮らしていた市民たちが、一挙に不幸の中に陥るのを見て、彼は仇を討ったような気になっているのか。しかし、タルーによれば、「コタールの態度の中には、意地の悪さは少しもない」という。それどころか、彼は「空と街の壁との間に閉じ込められた人々を愛しはじめ」てさえいる (I, 1380)。

コタールは理解も友情も求めてはいない。彼が求めているのは、同じ不幸を生きる共犯者である。ペストの到来は彼に格好の機会を与える。閉鎖された街では、誰もが同じように苦しまねばならない。カリギュラがローマ市民に与えようとした「平等の賜物」は、皮肉にもペストによってオラン市民に与えられる。

「彼が望まないただひとつのことは、他人から引き離されることである。彼はひとりぼっちで囚われの身となるより、皆といっしょに包囲されることを望

んでいる」(I, 1378) と、タルーは言う。コタルにとって一番恐ろしいことは、ひとりで苦しむことである。だから、彼はオラン市民全体を巻き込んだ不幸を喜ぶ。「もちろん、具合はよくありません。しかし、少なくとも、皆、同じ風呂のなかに入っている訳です」(I, 1377) と、彼は言う。彼にとって重要なのは、幸不幸ではなく、皆と同じであることなのである。

『異邦人』のムルソーは、誰がみても変わり者だが、2 度にわたって、「自分は皆と同じだ」と言う<sup>(12)</sup>。『カリギュラ』のケレアは、「皆と同じように」「生きて幸せになりたい」と言う<sup>(13)</sup>。『ペスト』のリューもまた、オランの住民たちと「愛、苦悩、追放といった確信を共有している」と述べる (I, 1468)。皆と同じであることは、彼らにとって、無垢の証なのである。だが、コタルにはそのような証は不可能である。皆と同じでありたいと願いながら、それができない彼は、皆が彼と同じになることを願う。彼がペストに同意するのは、それが「人間たちをいっしょにするただひとつの方法」(I, 1378) だからにほかない。

カリギュラと違って、コタルは誰かを殺した訳ではない。だが、ペストを是認し、歓迎した彼の罪は重い。作者は、結末で、彼に自殺よりもなお悪い運命——逮捕——を与え断罪する。しかし、彼の罪は、きわめて人間的な罪でもある。ペストに罹り強制的に隔離される患者とその家族は、「できることなら自分たちとともに全人類を死に引きずりこみたいと願う」(I, 1376) と、リューーは言う。彼らとコタルとの間に、一体、どれほどの違いがあろうか。誰の心にもそのような悪魔的な部分は潜んでいる。誰もがコタルになりえるのである。

コタルの物語は、人間には他者が絶対に必要であること、それ自体なんらの罪でもなく、他のなによりも自然で人間的なこの欲求も、しかるべき出口をもたない場合は、悪に加担する危険なものとなりうることをあらわしている。

(12) 「僕は皆と同じなのだ、全く同じなのだ、彼(弁護士)に言いたかった」(*L'Etranger*, I, p. 1173)。「彼(予審判事)は、いきなり、ママンを愛していたかどうかを僕に尋ねた。『はい、皆と同じように』と、僕は答えた」(I, p. 1174)。

(13) *Caligula*, I, p. 78.

だからこそ、タルーはコタールに関心を寄せ観察するのだらうし、リウーは警官に殴られたコタールの顔にいつまでもつきまとわれるのであろう。

物語の結末近くで、リウーがコタールを「無知な、すなわち孤独な心の持ち主」(I, 1469)と評していることは、注目に値する。「この世にある悪は、ほとんどいつも無知からくるのであり、善意もまた、啓蒙されていなければ、悪意と同程度の被害を引き起こしうる」(I, 1326)と、リウーは別の箇所で書いているからだ。コタールの物語は、孤独から逃れたいと願うひとりの人間が、無知の犠牲となり、悪に同意し破滅する悲劇を描いているのである。

## 背 教 者

『追放と王国』に収められた短編「背教者」の主人公であり語り手でもある元宣教師は、権力への意志に憑かれた人物である。彼はカトリックの教義で現地人を支配するためにサハラ奥地に赴く。囚われの身となり、物神の小屋に閉じ込められ、妖術師に舌を切り取られた彼は、「善の支配は不可能」であり、「悪の支配だけが完璧である」(I, 1589)と悟り、それまで信じてきた一切を否定し、物神を信じるようになる。

「そうだ、私は奴隷だった。しかし、もし私もまた邪悪になれば、足枷をはめられた足としゃべれない口にもかかわらず、私はもはや奴隷ではあるまい」(I, 1590)と、彼は言う。彼の改宗にはさまざまな解釈が可能であろうが、ここには精神分析でいう「攻撃者との同一化」がみられるのではないか。「攻撃者との同一化」とは、アンナ・フロイトの用語で、「外界からの危険に直面した主体が、攻撃をそのまま自分のものとしたり、攻撃者を肉体的あるいは精神的に模倣したり、攻撃者を示す力の象徴を身につけたりすることによって、攻撃者と同一化する」<sup>(14)</sup> 心的メカニズムであり、攻撃される者が、攻撃する側にまわり、攻撃の対象を他に求めることによって、自らに与えられる脅威を減少

(14) J. Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, P. U. F., 1988, p. 190.

させようとするものである。彼の過去を象徴するもの——「ヨーロッパ、理性、名誉、十字架」——すべてが彼の攻撃の対象となる。背教者は、自分と同じく、全ての人間が舌を切り取られることを望むのである。

攻撃者に同一化した犠牲者は、ときとして攻撃者以上に攻撃的になる。タガサの住民以上に狂信的な信徒となった背教者は、新しい宣教師を射殺することを決意する。彼は物神の悪の支配が全ヨーロッパに及ぶことを夢みる——「わが主人たちは、兵士どもを打ち破り、ことばと愛を打ち破るだろう。砂漠をさかのぼり、海を渡り、ヨーロッパの光をその黒いヴェールで包むだろう。(……) 彼らはその塩を大陸に撒くだろう。あらゆる生長、あらゆる青春は減じるだろう」。だが、彼は直後に奇妙なことを言う——「足枷をはめられた唾の群衆が、真の信仰の残酷な陽の下に、世界の砂漠の中を、私とならんで歩くだろう。私はもうひとりではないだろう<sup>(15)</sup>」(*I*, 1592)。

彼は奴隷でなくなるために、攻撃者に同一化したはずである。それなのに、宣教師を殺した「勝利の瞬間」に、彼は奴隷の側になっている。彼の「混乱した精神」の中で、「自分が邪悪になれば、奴隷ではなくなる」という論理は、いつの間にか「万人が奴隷になれば、自分は孤独ではなくなる」という別の論理に置き換えられているのである。彼が物神の悪の支配を願うのは、結局のところ、他者との絆を求めているからではないか。たとえそれが奴隷の共同体であろうとも、ひとつの共同体に帰属することこそが彼の望みだったのではないか。

彼は他人と対等の関係を築くことができない人間である。彼は自己と他者との関係を、支配／被支配、主人／奴隷といった上下の関係でしかとらえることができない。彼にとって、その中間は存在しない。だから、極端から極端へ走る。主人になれないのなら、奴隷になるしかないのである。だが、物神の悪の支配は、万人に隷属という平等を与えるだろう。そのとき、彼ははじめて他人と対等になれるのである。

カリギュラは、ローマ皇帝の権力を利用して、全ての人間を自分と同じ不幸の中に引きずり込もうとした。コタールは、全ての人間を自分と同じ不幸の中

---

(15) 傍点引用者。

に生きさせるベストの到来を歓迎した。背教者は、物神の悪の支配が全ての人を同じ隷属の中に生きさせることを願っている。3人の悪魔的人物の中には、いかなる手段を使っても孤独を回避したいという欲望、ひとりで苦しむことを逃れたいという欲望をみることができる。

しかし、当然ながら、物神の支配は実現しない。タガサの住民はフランスの軍隊に打ち負かされる。血まみれの妖術師に、背教者は「憎しみの顔を捨てろ。善良になれ。我々は間違った。またやり直そう。慈悲の街を作り直そう」(I, 1593)と呼びかける。隷属の中で他者との絆を築くという夢は、今度は慈悲の街での連帯という夢に置き換えられる。

背教者は、支配者となることを夢みて、タガサの街に宣教に赴き、万人が奴隷となることを夢みて、新しい宣教師を射殺した。彼にとって重要なのは、主人であるか奴隷であるかということではなく、どのような形であれ、他者と結びつくことなのではないか。善の支配も、悪の支配も不可能であり、隷属の共同体を作ることもまた不可能であるとすれば、あとに残るのは、たとえそれがどんなに困難であろうと、慈悲の共同体を作ることだけである。その意味では、「背教者」は、他者との関係を支配／被支配という垂直方向でしかとらえられなかった人間が、対等さらには連帯という水平方向の関係に目覚める物語、支配／被支配という関係から、隷属の中の対等へ、そして慈悲の中での連帯へと進む物語といえるだろう。

## クラマンズ

背教者と同じく、『転落』のクラマンズは、他者との関係を支配／被支配という上下の関係でしかとらえられない。ただ、彼はつねに支配者の側にたつことを望む。誰かの下になることは彼には耐えられない。人生の成功者としてつねに他を支配してきた彼は、ある日、橋の上で笑い声を聞く。それをきっかけとして、橋の上から身を投げた若い女性を見殺しにした記憶がよみがえる。

自分に非難されるべき点がわずかでもあると思うと、彼はそれまで自分に抱

いてきた美しいイメージを維持できなくなる。かくして、彼の「転落」が始まる。放浪の末、アムステルダム船員バーにたどりついた彼は、そこで「改換者にして判事」の仕事を始める。バーに迷い込んできたブルジョワをみつけては、自分の罪を告白してみせるのである。

だが彼の告白は、「裁きを皆のうえに押し広げ、自らの肩にかかる罪の重みを軽減する」(I, 1546) ための策略にほかならない。彼は「縦横無尽に自分を糾弾」しながら、「万人の肖像であると同時に誰のものでもない肖像を作り上げ」、「話の途中でこっそり『わたし』から『われわれ』にうつって」いく (I, 1547)。彼はことば巧みに、聞き手が自分で自分を裁くようにしむけ、最後には聞き手に告白を迫る。

『ペスト』のコタールが使った「皆、同じ風呂の中にいる (*tout le monde est dans le bain*)」という表現を、クラマンズが「皆を風呂の中に叩き込む (*mettre tout le monde dans le bain*)」(I, 1546) という形で使っていることは大変興味深い。クラマンズは他人を——まず聞き手を、そして彼を通して全人類を——自分と同じ罪の中に引きずり込もうとしているのである。

だが、彼が求めているのは、皆と同じになることではない。カリギュラ、コタール、背教者は、ひとりで苦しむことを避けるために、万人を自分と同じ不幸に引きずり込もうとした。クラマンズはさらにその先へ行く。彼が「皆を風呂の中に叩き込む」のは、「自分が日光にあたって体を乾かす権利をえるため」(*ibid.*) にほかならない。人間は皆、罪人であるとしても、そこにはヒエラルキーがある。誰もが「同じ汁の中 (*dans le même bouillon*)」につかっている」としても、少なくともクラマンズは「それを知っているという優位性」をもっている。彼は罪人の中の罪人として君臨し、「自分だけが登りえる頂きにたち、そこから万人を裁く」ことを望んでいるのである (I, 1547–1548)。

だが、罪人の群れの中で特権化されるのは、クラマンズだけではない。彼の告白の聞き手もまた特権化される——「私にはもう友人などいません。共犯者がいるだけです。そのかわり数は増えました。人類全体がそうなのですから。そして人類全体の中でも、あなたが一番です。そばにいる者がいつだって一番

なのです」(I, 1513)。カリギュラやコタールや背教者にとって問題なのは、「自分」と「全ての他者」という一対多の関係であった。彼らは個々の他人をみているようで、実は全くみていない。一方、クラマンズは、ひとりの人間を前にしている。聞き手の向こう側に全人類をみているとしても、少なくとも一対一の関係が彼にはある。「私は薄汚い天使に取り巻かれ、オランダの空高く君臨し、最後の審判に引き出される群衆が濃霧と水を分けて私の方へ登ってくるのを眺める。彼らは次第に近づいてきて、最初のひとりはいもうそこまで来ている」(I, 1549) と、彼が言うときの「最初のひとり」とは、目の前にいる聞き手以外のだれでありえようか。

聞き手がクラマンズの告白にどのような反応をするかは予想がつかない。クラマンズの思惑通り、告白を始めるかもしれないし、クラマンズを軽蔑し、彼の話を笑い飛ばすかもしれない。あるいはまた、クラマンズに同情し、進んで同じ境遇に身をおくかもしれない。クラマンズは密かにこの第3の反応を望んでいるのではないか。

告白の2日目に、クラマンズは「友人が投獄されたので、親友の味わえないような安楽は自分も享受すまいと、毎晩、地べたに寝た」男の話をする(I, 1491)。告白の最後に、彼は再びこの男の話を取り上げる——「大きな白いものが窓ガラスに乱れ飛んでいる。あれはたしかに鳩だ。とうとう下界に降りる気になったのだな。(……) よい知らせをもってくるのならいいのだが。選ばれた者だけでなく、皆が救われる。富も苦しみも公平に分けられ、例えばあなたは、私のために今日から毎晩、地べたで寝ることになる<sup>(16)</sup>」(I, 1550)。勿論、クラマンズはそのようなことを本気で信じている訳ではない。「なんという夢想だ」と、彼は自分の言ったことをすぐさま否定する。しかし、もし、聞き手がクラマンズのために毎晩、地べたで寝ることを進んで受け入れたならば、クラマンズは救われるのではないか。

自分の苦悩を軽減するために、他人を自分と同じ不幸の中に引きずり込むことは、無論、罪深いことである。しかし、もし、誰かが自発的に苦痛を共有し

(16) 傍点引用者。

てくれるなら、全ては変わるのではないか。クラマンズは次々と聞き手を変えて、告白を繰り返す。「今夜にでも、また始めますよ」(I, 1549)と、彼は言う。だが、それは、いつの日か、彼の苦悩とともに担ってくれる相手があらわれ、仲介者として彼と人類を和解させてくれることを求めていることではないだろうか。

## お わ り に

カリギュラ、コタール、背教者、クラマンズの4人の人物は、いかに孤独を逃れるか、いかに他者との関係を築くか、ひとりで苦しんでいる人間にとってどのような関係が可能かという問題を提起している。

カリギュラは、愛する者を失った自らの苦悩を理解させるために、ローマ市民を彼と同じ不幸の中に生きさせる。コタールは、オラン市民を彼と同じ不幸の中に陥れるベストを歓迎する。背教者は、隷属の中で他者とむすびつくために、物神の悪の支配を望み、新しい宣教師を射殺する。クラマンズは、裁きを回避し、他者を支配するために、全人類を罪の中に引きずり込もうとする。彼らは人間の愛情や友情、連帯を否定する悪魔的人物であるが、同時に自らの苦悩を他人に分ちもってもらいたいと願う孤独な人物でもある。

彼らは全ての人間を敵視している。だが、彼らが必要としているのは、苦悩をともに生きてくれるただひとりの人間ではないか。そのような人間がいれば、人類への敵意は愛に変わるのではないか。その意味で、彼らの物語は、裏返しの人間愛の物語といえるのではないだろうか。

悪魔は最初から悪魔なのではない。悪魔とは堕ちた天使の謂いである。カミュが描く悪魔的人物は、他者との絆を夢みながら、それがえられないために、いっそう悪に埋没し、自分も他人も不幸にしてしまう人間にほかならない。彼らの人間的魅力も、彼らの物語からえられるカタルシスも、そこにあるというべきであろう。